

下大和橋 しもやまとばし ● Shimoyamato-bashi
(道頓堀川)

道頓堀川の最上流に架かる下大和橋。橋名の由来となった大和町は、金比羅詣の発着場として賑わう東横堀川堀止付付近から、西は日本橋付近までの東西に長い町だった。

下大和橋は道頓堀川開削後まもなく、現在の位置に橋が架けられたと思われるが、明暦3(1657)年の地図には中橋とあり、江戸時代中期の浄瑠璃・近松門左衛門の『生玉心中』に登場する大和橋出見世の場では「ころころの商ひも、みな世渡りの大和橋、下行く水の泡よりも、色にぞ銀(かね)は消えやすく」(碑がある)と描かれているように、大和橋と表現されている。

当時の道頓堀川は、幅が40m余り橋長も40m以上あり、町橋としては規模が大きく維持にかかる橋筋の負担も大きかった。

明治36(1903)年に巡航船の船着場ができ、同年大阪で開かれた内国勸業博覧会を機に、道頓堀川、西横堀川を巡る通勤と観光を兼ねた交通機関として賑わっていた。しかし、市電の拡張に伴い大正3(1914)年に廃止された。

橋は昭和3(1928)年に近代橋に架け換えられた。現在の橋は、同62(1987)年に完成し、植樹柵などが整備されている。

